

司 式 熊 田 雄 二 牧 師
奏 楽 森 永 美 保 姉 妹

前 奏
開 会 招 詞

* 賛 美 歌 15 : 1 わが主の御業はことごと正し

わが主の御業はことごと正し 妙なるみ旨に全てを任せん
主は我が神なり ともしき時の 我が助けなり アーメン

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈 禱 書 3 罪 の 告 白 ②

主なる神よ、あなたの御前に背きの罪を告白します。わたしは聖なる戒めに従わず、失われた羊のように迷い出て、思いと言葉と行いにおいて罪を犯しました。しなければならないことをせず、してはならないことをして、自分の身に、あなたの怒りと裁きを招きました。憐れみに富んでおられる父よ、罪と過ちを悲しむわたしに憐れみを注いでください。神の独り子である救い主の名によって、わたしを赦してください。聖霊の恵みによって、わたしを新しく生まれ変わらせてください。願わくは今から後、み栄えのために生きる者とならせてください。

主イエス・キリストの御名によって。アーメン。(詩編32、イザヤ53、ローマ7)
罪の赦しの宣言

十 戒 祈 禱 書 4

- あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
- あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
- あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないでおかない。
- 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
- あなたの父と母を敬え。
- あなたは殺してはならない。
- あなたは姦淫してはならない。
- あなたは盗んではならない。
- あなたは隣人について偽証してはならない。
- あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。(出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 15 : 2 わが主の御業はことごと正し

わが主の御業はことごと正し 嵐の中にも安けく憩わん
主は我が父なり 悩める時の 我が救いなり アーメン

公 同 の 祈 禱 祈 禱 書 12 降 誕 節 第 五 主 日 主 の 洗 礼

愛する神さま、わたしたちの主イエスが、ヨルダン川で洗礼を受けられたとき、聖霊が鳩のよう
に降り、天よりの御声が、主イエスを神の子であると宣言しました。

貧しい人々に福音をもたらし、捕われた人々に解放を宣言し、見えない人の目を開き、苦しめ
られていた人を自由にするために、主はキリストとして油注がれました。

わたしたちは洗礼によってキリストに結ばれ、主の働きにあずかるために召されたことを覚えて、心から御名を賛美します。 (マタイ3、イザヤ35、ローマ6)

献 金 (黒) 教会活動 (赤) 沖縄伝道所を覚えて 70

今ささぐるそなえものを 主よ きよめて うけたまえ アーメン

聖 書 朗 読 ルカによる福音書4章14～30節 (新約聖書107頁)

説 教・祈 禱 「宣教と愛の業」 熊田雄二牧師

* 賛 美 歌 60:1 命の御言葉

命の御言葉たえにくすし 見えざる御神の旨を示し 仕えまつる道を教う
命の御言葉妙なるかな 命の御言葉くすしきかな アーメン

* 主 の 祈 り 祈 禱 書1

天にましますわれの父よ
願わくは御名をあがめさせたまえ
御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ
我らの日用の糧を 今日も与えたまえ
我らに罪を犯す者を我らが許すごとく 我らの罪をも許したまえ
我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ
国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

* 頌 栄 65父・御子・御霊の

父・御子・御霊の大御神に
ときわにたえせず 御栄えあれ 御栄えあれ アーメン

* 祝 禱

後 奏 (黙禱)

報 告

I メシア任職後、悪魔の誘惑のテストを受け、メシアの仕事開始

3：20洗礼者ヨハネが牢に閉じ込められたことは、3：21イエスのメシア任職の洗礼をもってヨハネの仕事は終わったと見てよいでしょう。メシア任職式の洗礼で4：1「イエスは“霊”に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった。」そして、悪魔の誘惑のテストのあと、4：14「イエスは“霊”の力に満ちてガリラヤに帰られた。」旧約預言者はヨハネまで、いよいよ力強いメシアの登場です。

ところが、「ナザレで受け入れられない」という小見出しにつながっていきます。この部分は、マタイ福音書もマルコ福音書も、もっと後の方で語るのですが、ルカはいきなりここにつながります。おそらく、異邦人伝道の使徒パウロの伝道旅行を共にしたルカの実感から来るものでしょう。

パウロは異邦人伝道の使徒ですが、ギリシャ・ローマの町に入った時、ユダヤ人の会堂シナゴグがあれば、まず、安息日にシナゴグに行きます。救いはまずユダヤ人から始めます。ところが、多くのユダヤ人には受け入れられないので異邦人に向かうのが、パウロの伝道旅行でした。ですから、主イエスが故郷のナザレで受け入れられなかった時、旧約時代に救われた異邦人の名を挙げるお話につながったのでしょう。実際、パウロも何度も殺されそうになりましたし、主イエスはナザレ村の人々に崖から突き落とされそうになりました。

「言(ことば)は自分の民の所へ来たが、民は受け入れなかった。しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には、神の子となる資格を与えた」(ヨハネ福音書1：11-12)。これが、ユダヤ人伝道でも異邦人伝道でも同じでした。多くの人は受け入れなかったのですが、受け入れた人もいました。ユダヤ人もギリシャ人も。

今年の正月は、故郷にお帰りになった方々は少ないでしょう。人間としてのイエスの地上の古里はナザレですが、神の子としての古里は天国です。イエスをキリストと信じる者たちも、それぞれ地上に古里はありますが、キリストによって神の子とされたという意味では、天国が古里です。

これは、結局「この人は、いったい、誰か」という信仰告白の問題です。この人はどこから来たのか。ナザレ村からということだけか、それとも天から来られたのか。ナザレ村出身ということしか考えられなければ、ナザレ村の有名人です。村人が期待したのは、教えよりも「奇跡を行なう力」でした。有名人の出身地ナザレ村を誇りたいのです。しかし、奇跡は見世物ではありません。イエスがキリストであることのしるしです。

II メシア預言の実現

ナザレで、主イエスは安息日に会堂に入って、聖書を朗読されました。その箇所は、イザヤ書61：1です。イザヤ書後半の「主のしもべの歌」の続きのような聖句です。

「主の霊が私の上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主が私に油を注がれたからである。主が私を遣わされたのは、捕らわれている人には解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためであ

る。」

そして、「この聖書の言葉は、きょう、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と言われました(21節)。すなわち、油注がれたメシアとは私だと言われました。すると、人々はイエスをほめたたえたかと思うと、「この人はヨセフの子ではないか」と言い始めました。

そこで、主イエスは、「うわさの奇跡をここでもしてくれと言うのだろう。預言者は故郷では歓迎されないものだ」と言われました。そして、旧約時代に救われた異邦人の例を挙げられたのです。シドン地方のやもめとシリア人のナアマン将軍です。

ナアマン将軍の話は、私が今年リジョイスの担当ヶ所となりましたので、いち早くお話ししましょう。

2021年8月3日(火) 列王記下5章 安心して行きなさい

「ナアマンは言った。「それなら、らば二頭に負わせることができるほどの土をこの僕にください。僕は今後、主以外の他の神々に焼き尽くす献げものやその他のいけにえをささげることはしません。ただし、この事については主が僕を赦してくださいますように。わたしの主君がリモンの神殿に行ってひれ伏すとき、わたしは介添えをさせられます。そのとき、わたしもリモンの神殿でひれ伏さねばなりません。わたしがリモンの神殿でひれ伏すとき、主がその事についてこの僕を赦してくださいますように。」エリシャは彼に、「安心して行きなさい」と言った。(17~19節)」

4章に続いてエリシャが行なった奇跡は、隣国アラムの将軍ナアマンの重い皮膚病を癒やしたことです。ナアマンは深く感謝して贈り物をしようとしたが、エリシャは癒やしたのは神であると知っていたので、受け取りませんでした。

その時ナアマンは、自分を癒やしてくださった主なる神だけを礼拝したいと告白しました。しかし、自分の主君が、他の神を礼拝する時、介添え役をする将軍もひれ伏さねばならないので、それを赦してくださいと願いました。それに対してエリシャは「**安心して行きなさい**」、直訳すると「シャローム(平安、平和)に向かって行きなさい」と言いました。これを偶像礼拝の許可だと解釈する人もいれば、ナアマンは初心者なのでそのうち十戒を学ばばやめるだろうと解釈する人もいます。

どちらでもないのではないのでしょうか。ナアマンは、もう他の神を拝みたくないのです。自分を癒やしてくださった主なる神だけを礼拝したいのです。偶像を拝んではならないという十戒を学ぶ前から、「もうこの神だけを礼拝したい」という思いでいっぱいです。初心者ほど燃えているのです。だから、ナアマンは職務上しなければならないことをしたくない、してはいけないと思ったからこそ願っているのです。

だからエリシャは、許可したわけでも、そのうち分かるだろうと思ったわけでもありません。「あなたが願っている、主なる神との平安に向かって行きなさい」と言ったのです。このエピソードは、列王記の王たちが次々と偶像礼拝に向かう中で、特筆すべき出来事です。主なる神を知らない異邦人の救いです。私たちも「初めの愛」を思い起こしましょう。

そこで、「イエス様、あなたこそキリストです」と、心から喜んで告白する気のない人々には、奇跡を行なうことは意味がありません。「預言者が敬われな」かったのは、預言者

の古里、祖国イスラエルでありましたが、預言者はキリストを預言していました。だから、イエスをキリストと信じることができないなら、「預言者が敬われない」と同じです。

Ⅲ 福音宣教の力

福音宣教は“霊”の力に満ちて行なわれるものです。

メシア任職式の洗礼で「イエスは“霊”に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった。」

(4:1) 悪魔の誘惑のテストのあと、「イエスは“霊”の力に満ちてガリラヤに帰られた。」(4:14)

そして、十字架の死と復活のあと、聖霊降臨(ペンテコステ)において、弟子たちに聖霊が降りました。すると、弟子たちは力を受けて、“霊”の力に満ち満ちて、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また地の果てに至るまで、キリストの証人となりました(使徒1~2)。

これが現在まで2000年続いているのです。上福岡教会も、“霊”の力に満ちた宣教師と伝道者によって始まりました。来年は伝道開始60周年を迎えます。60年間、上福岡教会の伝道と教会形成は、“霊”の力に満ちて行なわれてきました。主役は、聖霊です。キリストの霊なる聖霊です。

そこで、“霊”の力に満ちて行なわれる宣教と愛の業はセットであると教えられます。

「主の霊が私の上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主が私に油を注がれたからである。主が私を遣わされたのは、捕らわれている人には解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。」

この言葉は、教会の歴史でなされ続けてきました。教えることと病気をいやすことは、今日に至るまで、キリストがしておられる御業です。日本にも宣教師というキリストの弟子たちが遣わされて、教えのためにはミッション・スクール、病気をいやすためには病院が、各地に建てられました。

癒しの奇跡だけ見たいという人たちを、イエスは本気で相手をされなかったと、福音書記者たちは記しています。悔い改めて福音を信じなければ、一時的に癒されても死ぬだけです。主イエスの癒しは復活に向かう意味と印を伴っていたので、復活を信じなければ、奇跡を見たいだけというのは空しいのです。

宣教の言葉は愛の行いと共にあったというのが、始めからの伝道です。福音書を読むと、どちらが先ということはありません。ある時は宣教が先で、ある時は癒しが先であり、ある時は同時であります。油注がれたメシアとなった主イエスは、今も、預言者・祭司・王として、御業をなさっています。今日も、弟子たちを用いて御業をなさっているのです。私たちも自らを整えて用いられる器となりましょう。